

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## コルタサルの作品における空白の考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Morikawa, Kaori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1477">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1477</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## [博士論文審査の要旨]

アルゼンチンの作家フリオ・コルタサルは、完成度の高い幻想的な短編小説とともに、実験的な手法と言語を駆使した長編『石蹴り遊び』によって、ラテンアメリカ文学のみならず二十世紀の世界文学を代表する作家のひとりとして高く評価されている。本論文は、彼の1940年代から60年代前半までの短編および中編、さらに代表作の長編『石蹴り遊び』を論じたものである。本論文著者は、これらの作品が不可解な結末や非論理的な展開、整合性の欠如などによって読者に戸惑いを与える点に着目し、読後に残る違和感をコルタサル作品に通底する「空白」として定義する。この「空白」というキーワードから作品を照射し、超越的な存在の探求をテーマとした『石蹴り遊び』のみならず、初期の幻想譚においても読者による探求が志向されている点を、手堅く明快に論証している。コルタサルの短編が持つ幻想性や『石蹴り遊び』による探求といった論点は特に新しいものではないが、多くの先行研究を精査しつつ、「空白」という視座によってその作品世界の全体像を浮かび上がらせることに成功していると言える。以上の理由で、本審査委員会は本論文が学位請求論文として高い評価に値するものと判断する。

## [論文審査結果]

本論文は、「序章」から の三部構成の本論、「結論」からなる。本論文著者は、まず「序章」において、幻想的と形容されることの多いフリオ・コルタサルの作品が、読後も解消しない違和感を特徴としており、そうした違和感を生む決定項の不在を「空白」として定義する。この「空白」の意味するところを明らかにするという本論文の目的を明示したうえで、それ以降の各部において検討される作品および提起される問題点について、明確に整理している。

第一部「個人的運命の超越」は、「変身」と「夢」と題する二つの章によって構成されている。第1章「変身」では、死後発表された『引越し』と、『遊戯の終わり』に収められた『山椒魚』を主に取り上げ、自己同一性の喪失と新たな自己との遭遇、自己の分身との邂逅および果たしえぬ合一、さらに両者をつなぐための言葉の希求を、コルタサルの変身譚の特徴として指摘している。そうした作品の前提となるのが、自己と非論理的に結びつく *figuras* (影たち)、つまり自己との根源的な同一性を持つ他者の存在である。本論文著者は、作家自身の言葉とともに、他者性の獲得がコルタサルにとって近代的な枠組みからの自己の解放につながるものであることを明らかにする。他者性を獲得することは十全には果たし得ぬものであるが、それでも他者との戯れを描こうとするコルタサルの文学的営為が、言葉によって複数の他者と結ばれる詩人のそれと共通するという主張は、優れた着眼と言える。

第2章「夢」では、『遊戯の終わり』の『夜、あおむけにされて』と『水底譚』を中心に、*figuras* との時空を超える交わりと、夢との関係について論じている。『夜、あおむけにさ

れて』で語られる主人公とアステカ族の男による夢の往還が、同一の運命の反復であることを指摘したうえで、論理的な秩序から逸脱した『水底譚』の解読へと論を展開させている。この作品は自己同一性の揺らいだ登場人物たちの錯綜した関係の特徴とするが、本論文著者は、それらを複数の生による永遠回帰を描いたものとして捉え、夢をテーマにした他のコルタサル作品と同じく、生と死の境界が消滅する世界を描いたものであることを明らかにしている。難解な『水底譚』に関する手堅い論証は、特筆すべき点と言える。

第 部「現実の二重性」の第 1 章では、登場人物の強迫観念が生む異常な精神状態について論じている。コルタサルの幻想的な作品が彼の強迫観念から生まれたものであることはよく知られているが、本論文著者は、まず『遊戯の終わり』に収められた『昼食の後』を取り上げる。主人公の少年と正体不明の同伴者の関係について、先行研究を精査した後、語り手である少年の神経症的な行動に着目する。そこから同伴者の実在性に疑問を呈し、少年の内的不安が同伴者として描出されたとする解釈によって、コルタサルの生み出す非日常的な世界の一端を解き明かしている。同じく『遊戯の終わり』所収の『動機』については、主人公の肥大化した自尊心が物語の核である点を指摘している。この作品は推理小説としての体裁を有するが、合理的な方法ではなく、過剰な自意識が生んだ結果が真相にたどり着くという、非合理的な結末が付されている。偶然の裏に潜む法則性にコルタサルが高い関心を示していたことを踏まえて、理性を超越する秩序へと考察の射程を広げている点は評価に値する。

つづく第 2 章では、『遊戯の終わり』の『バッカスの巫女たち』と、『秘密の武器』所収の中編『追い求める男』を取り上げ、人間の根源的な欲求と、それを抑圧する合理的現実との相剋について論じている。昆虫学者のごとき分析眼をもつ『バッカスの巫女たち』の主人公は、劇場で狂乱する聴衆を観察するだけで祝祭的な陶醉に加わらず、そのことに対して罪の意識を抱いている。この点に着目して、ニーチェを典拠としながら、語り手である主人公を「墮落したアポロン像」として解釈し、彼と対置する形で、視覚の欠如した盲人を「ディオニュソス的なもの」の象徴として捉えている。本源的な世界との一体感と、合理性に依拠する人物の空虚さが対照されているとする主張は、『追い求める男』を論じる視座として十分な説得力を有している。

『追い求める男』はコルタサルの作家としての分水嶺とも言われるが、本論文著者は、現実の欺瞞に対する作家のまなざしを初期の作品から通底するものとして位置づけている。この作品がサクソ奏者ジョニー・カーターによる、時間や空間を超越する探求であることはかねてより指摘されているが、本論文では、合理的に認識される現実の向こうに真の自己を求めたジョニーの探求とともに、『バッカスの巫女たち』の語り手と同じく、合理的な現実から離れることのできないジャズ批評家ブルーノの悲劇性をも明らかにしている。そのうえで、第 部で考察した作品を総括する形で、コルタサルの創作行為が合理主義に対する反抗であったとする見解を示し、さらに初期の作品と異なり『追い求める男』では非合理的なものとの邂逅が能動的に求められている点に着目し、長編『石蹴り遊び』にい

たるコルタサル作品の軌跡を明確に提示している。

最後の第 部「『石蹴り遊び』における絶対の探求」では、代表作である長編小説について三つの章にわたって論じている。西洋の伝統的な価値観に対する懐疑的な姿勢はコルタサルの作品に通底するものであるが、まず第 1 章では、パリにおける主人公オラシオの探求が、合理的な現実がむしろ不条理であることを示し、仲間たちとの錯綜した議論などによって対立物が止揚される躍動的な生を希求している点を、バフチンの理論を援用しつつ論証している。つづく第 2 章では「遊戯」をキーワードに、ブエノスアイレスへの帰郷後のオラシオの探求について考察を進めている。「遊戯」がコルタサルの作品における重要なモチーフであることは論を待たず、オラシオが友人トラベラーとの間でおこなう「橋のゲーム」など分身との和合についても常々指摘される論点であるが、本論文著者は、分身との和合の成就ではなく、儀式的空間としての遊戯の反復こそが探求におけるひとつの解答であるとする独自の解釈を試みている。第 3 章では、『石蹴り遊び』の特異な形式そのものが、閉ざされた伝統的な秩序を解体し、再構築しようとする作品の内容と相関関係にあることを、エーコ、ヤウス、イーザー等の理論とともに明示している。また読者に向けた「指定表」から欠落する章を「空白」として再定義し、オラシオの探求の挫折など物語に穿たれた「空白」と同様、読者に対してその充足を求める作者の意図を明らかにするなど、『石蹴り遊び』が様々なレベルで開かれた作品であることを示す試みもおこなっている。

最後に、上記の論点およびその検討の結果を整理し、コルタサル作品における「空白」が読者の能動的なアプローチを促すものであるとする結論と、今後の課題についても言及して、「結論」の章が閉じられている。

以上概観したように、本論文は、冒頭で提起した問題に対して、さまざまな観点から検討を加え、明快にその根拠を示し、結論を導くことに成功している。本論文の中心テーマである「空白」と各部・章との整合性をより明示的に述べるなど改善すべき点はあるものの、本論文著者の論者としての視座には一貫性が認められ、また各論の随所においては刺激的で優れた見解が示されており、真摯に問題に取り組む姿勢も高く評価できる。従って、本学大学院博士論文として内容的にも、体裁としても申し分のないものであると判断できる。

## **【最終試験結果】**

最終試験は2013年2月7日午後1時から、本学の三木記念会館で実施され、野村竜仁(主査)、福嶋教隆、成田瑞穂の3名の本学教員と、法政大学の大西亮准教授が審査に当たった。審査は公開でおこなわれ、最初に学位申請者が論文要旨を述べた後、各審査委員が論文に対する意見や感想を述べるとともにいくつか質問をして、申請者がそれに回答するという形式で進められた。

審査員からは、上記の「論文審査結果」に記したさまざまな講評をはじめ、内容に詳しく踏み込んだ忌憚のない意見が数多く開陳された。コルタサルに関する国内外の先行研究との関連性、小説作法に対するコルタサルの意識および作品構造についての再考の必要性、コルタサル作品の幻想性の特徴、書誌学的な研究の有無、また「土着性」「偶然」などの用語に関しても質問が出された。申請者は、これらの質問に対して誠実に回答し、主張すべきところは適切に主張し、指摘された誤りや助言についてはこれを受け入れた。最後に会場からの質問の機会を設けて公開審査は終了した。

公開審査後、4名の審査委員は別室で協議をおこなった。各審査員がそれぞれの見解と評価を述べ合い、話し合った上で、本論文が本学大学院博士課程文化交流専攻の博士(文学)の学位を授与するのに十分な価値があることを審査員全員が認め、最終結果を「合格」とすることに決定した。